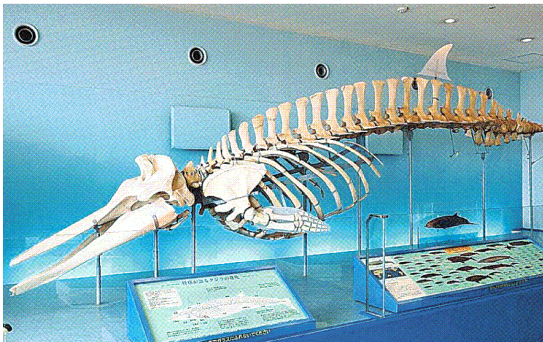




㊦2002年に西方海岸に打ち上げられたタイヘイヨウアカボウモドキ。後に、高齢の雌であることが分かった㊦かごしま水族館に展示されているタイヘイヨウアカボウモドキの全身骨格標本

タイヘイヨウ アカボウモドキ

学名 *Indopacetus pacificus*

英名はLongman's beaked whale。タイヘイヨウアカボウモドキのタイプ標本は、1882年にオーストラリアの海岸で発見された頭の骨(頭骨)。クイーンズランド博物館に所蔵されていたが、当時の館長によって1926年に新種として報告された。鹿児島で発見された2002年当時、標本はこのタイプ標本(頭骨)の他、ソマリアで1955年に発見された、かなり壊れた頭骨が知られているのみだった。その後、南アフリカで2個体、モルディブとケニアでそれぞれ1個体の計6個体が見つかったことが分かった。かごしま水族館の標本は7番目となり、下あごの先端が破損しているものの世界で初めての完全な成体の骨格標本となる。

薩摩川内で“世界初”の発見

2002年7月26日、川内市現在の薩摩川内市の西方海岸にクジラが打ち上がったと、かごしま水族館に連絡がありました。すぐスタッフが駆けつけました。喉元にある

V字の溝から、アカボウクジラ科とは予想できましたが、種は特定できないうまま、砂浜に埋めることになりました。その後、持ち帰った写真を

見ながら、国立科学博物館のイヨウアカボウモドキは誰一

おもしろ生き物図鑑 かごしま水族館から

山田格博士に電話した時のことは今でも鮮明に覚えています。体長6.5m、イルカのような頭をしたアカボウクジラ科のクジラ」と私が表現すると、受話器から聞こえたのは「タイヘイヨウアカボウモドキかもしれない」という言葉。この時までタイヘ

人見たことがなく、謎に満ちたクジラだったのです。色も形も分からないので、図鑑には点線で描かれていました。

1週間後、掘り出して丁寧に解剖し、さまざまな角度から調べました。DNAを検査したところ、基準となるタイプ標本とも一致。世界で初めて、タイヘイヨウアカボウモドキの姿形が分かった瞬間でした。

発見当日に採取した胃の中身からは、タコやイカなどの頭足類の一部と、魚に寄生するアニサキスのような線虫が発見されました。現在、骨は世界初の全身骨格標本として、かごしま水族館に展示されています。ひとつ一つの骨を取り外して調べられる構造となっており、海外からも研究者が訪れます。(展示課 海獣展示係 主査・大塚美加)